



TITLE:

人とイノシシの関係と共生の可能性(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

布施, 綾子

CITATION:

布施, 綾子. 人とイノシシの関係と共生の可能性. 京都大学, 2015, 博士 (地球環境学)

ISSUE DATE:

2015-11-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19388>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2016-11-24に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（地球環境学）	氏名	布施 綾子
論文題目	人とイノシシの関係と共生の可能性		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、人と野生動物たるイノシシとの関係について、その望ましいあり方を考察したものである。全国各地で出没するイノシシによる被害が多発する一方、地域的にはイノシシを「かわいい」などと肯定的にとらえる住民もあり、こうした葛藤を解決する方途が求められてきた。第1章では、人が野生動物に対して抱く多様な意識・感情の対立の克服を本論文の主題と位置づけることを述べる。本論文では、兵庫県や鹿児島県を対象地域として、アンケート調査・インタビュー調査や自動撮影カメラの画像分析を通し、前述の課題について解法を議論している。</p> <p>第2章では、日本に生息するイノシシについて、その生態を概観し、神戸市内の遺跡の発掘事例を通して、古くから人がイノシシを食べていたことが示された。</p> <p>第3章では、宗教・思想・法制の面から、人と野生動物の関係について、概観した。古代以来の日本文化の形成には仏教が大きく関わっているが、仏教では動物の命も人のそれと連続したものとみなす傾向がある。インドで発祥し日本にも伝わった仏教説話ジャータカ（本生譚）においては、釈迦の前世である鹿が命を救う物語などが語られる。法制の面から見ても、近代以前の日本では、殺生を制限する法令が敷かれたこともあった。近代以後の日本では、西洋由来の動物愛護法制が発展をとげてきたが、日本人に見られる動物観には前述のような生命観が背景にあることが指摘された。</p> <p>第4章では、神戸市において「イノシシ餌付け禁止条例」が制定されたことに関連して、神戸市東灘区を事例とし、住民と野生イノシシとの関係を実証的に研究している。第1節では、調査対象地域である神戸市の地理的条件を概観した。東灘区では六甲山の山林が住宅地と接しており、イノシシと都市住民が接触する機会が多いことが述べられる。</p> <p>第2節では、天上川沿いの地域において行った、アンケート調査とインタビュー調査の結果が示されたが、少なからぬ住民がイノシシについて「かわいい」などのプラスイメージを持っていることが明らかになった。インタビュー調査においては、多くの住民が条例を認識している一方、天上川河床に迷い込んだイノシシを「かわいそう」と感じ、餌を与えている実態も明らかになった。</p> <p>第3節では、同じく神戸市東灘区を事例とする、人とイノシシの行動調査の結果が示された。天上川中流部と保久良山において、人がイノシシと遭遇したとき、無視するか餌を与える・写真を撮るといった積極的行動をとるか、といったことを観察・分類・集計している。また、人の行動に対して、イノシシが近づいて食物をねだるかどうかといった、イノシシの反応も観察した。河床部と山間部という条件の違いによっても人のイノシシに対する行動は異なり、また年齢層によっても違いが見られた。</p> <p>第5章では、兵庫県の猟友会会員へのアンケート調査を通して、イノシシと狩猟の関係を検討した。神戸市の一般市民の抱くイノシシのイメージと比較して、イノシシにつ</p>			

いてのプラスイメージが少なく、マイナスイメージが多いとの結果が明らかとなった。猟友会会員のうち農林漁業従事者は、イノシシによる農作物被害にさらされていると考えられ、害獣駆除のために狩猟を行っているとは推測された。

第6章では、人とイノシシの関係について、狩猟に関連する動物であるイヌも含め、考察した。対象地域は、鹿児島県奄美大島の鳩浜地区で、研究は自動撮影カメラの画像の分析を通して行われた。画像に現れた動物を1日の時間帯ごとに集計すると、イノシシ成獣は人とイヌを避け、夜間に行動していることが明らかとなった。またイノシシ幼獣は、成獣とは異なり、昼間に行動していた。これらの分析から、イヌを伴った狩猟がイノシシの行動に影響していることが示された。

第7章の結論では、最初に提起されたイノシシに対する肯定的感情と否定的感情との対立の克服について、限定的ではあるが河床に迷い込んだイノシシが山に戻れるような側道を設置することなど、現実的な解法が提言されている。生態系保全の観点からは狩猟を継続することも望ましく、狩猟のための器具などが提案された。野生動物への観点は一様ではないので、解法も多様でなければならないというのが、本論文の結論である。

(論文審査の結果の要旨)

本論文で申請者は、人と野生動物たるイノシシとの関係について、その望ましいあり方を考察している。背景には、神戸市で2002年に「イノシシ餌付け禁止条例」が制定されたことがある。市街地と山林が接している神戸市では、イノシシに市民が襲われ負傷するなど被害が多発しているが、一方でイノシシを「かわいい」と感じる市民も少なからずいる。イノシシを「かわいい」と見るか、「危険・迷惑」と見るかの対立・葛藤を軸に据え、この対立の止揚へ向けた提言を本論文では行っている。

生態系保全のためにイノシシを駆除する必要性が指摘される一方、「かわいい」とみる感性からは「動物にも生きる権利がある」との見解が導かれよう。人以外の動物に「生きる権利」を認めるかどうかは、哲学・倫理・思想・宗教的な問題である。キリスト教に代表される西洋思想では、人と動物を区別する傾向があるのに対し、仏教など東洋思想では、人と動物の命に連続性を認めてきた。しかるに今日世界的に普及している動物愛護思想は、主に西洋起源であるという側面もある。近年では、P. シンガーが『動物の解放』を著すなど、環境思想における多様な見解が出されている。このような流れを踏まえつつ、単に思索のみによらず、実証的なデータの収集・分析を通して先述の解法を求めたことに本論文の特筆すべき独創性がある。

本論文の成果として第一にあげられるのは、少なからぬ住民が、イノシシについて「かわいい」という共感的感性をいっていることを、実証的なデータで示したことである。神戸市東灘区におけるアンケートの結果では、約41%の人がイノシシを「かわいい」と答えていた(第4章第2節)。一方、「町にいて欲しい」と答えた人は約10%にとどまるなど、イノシシに対するアンビバレントな態度も明らかとなった。インタビュー調査からは、イノシシへの餌付けが条例で禁止されていることを承知しつつ餌を与える人もいることが示された。人が餌を与え、これに対応するようにイノシシが餌をねだるなどの事例が明らかとなり(第4章第3節)、イノシシを害獣とは一概に見なせないことが浮き彫りになった。ペットを「かわいい」と思うのは人として自然なことであり、一方で人は家畜の肉を食べる。この両極端のスペクトラムの中で、人とイノシシの一意には定めがたい関係を位置づけたことは、本論文の重要な意義ととらえることができよう。

本論文の第二の成果として、人のイノシシに対する感性が、地域や職業など人の属性により多様であることを示したことがあげられる。申請者は、兵庫県の猟友会会員1061名を対象にアンケート調査を実施した(回収率32.1%)。イノシシに対するとらえ方には、神戸市民と猟友会会員との間で、また農林漁業従事者とそれ以外の間で違いがあることが示されたが、これは多数のアンケート用紙を送付・集計・分析したことの成果である(第5章)。

本論文の第三の成果として、狩猟がイノシシの生態に影響を及ぼしていることを明らかにしたことがあげられる。狩猟は人とイノシシの関係の重要な側面であ

るが、鹿児島県奄美大島での自動撮影カメラを用いた事例研究（第6章）では、時間帯ごとの画像分析から、イノシシが人やイヌを避けている傾向が明らかになった。この分析過程で申請者は、イノシシが写ったものだけでも1768枚という膨大な数の画像の識別・分類を通して、イノシシの行動特性を実証的かつ精緻に解明した。

人と野生動物の望ましい関係は、立場により多様であり、単純な結論を導くことはできない。本論文で提案された、河床への側道の設置も、部分的な解法に過ぎないだろう。生態系保全のために狩猟の継続が必要とされたが、これも「動物の生きる権利」とは両立しないといえる。野生動物だけでない、ペットや家畜も視野に含めた検討も必要とされよう。しかし、申請者が本論文で人々の多様な立場・見解を尊重しつつ、動物たちの立場も踏まえ、解法の多様性について実証的な観点から有益な洞察を提起したことは、環境倫理・生命倫理といった思想面でも、環境・生態系保全管理という実際面でも、学界への寄与が大きいといえる。

よって本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年10月9日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、平成28年11月24日までの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公開可能日： 平成27年 11月 24日以降